

「日本の文化を見直す時期 III」

最近、機会があり夜間ベッド（寝台）上で寝ていたのを、和室の畳の部屋（寝床）で寝るようになった。数カ月間続けた結果感じたことは、寝起きに、寝台からの時と、畳の寝床からの時とでは、立ち上がりの労力がかかなり異なる事を思い知らされた。畳の上から起き上がるのにはかなりの力が必要となる（年のせいかな?）。それに反して寝台からの立ち上がりは非常に楽である。

様式トイレと、和式トイレの違いも同じことが言える。日本人の相撲取りが弱くなったのは、そのせいだと誰かが言っていたのを思い出した。

35年前に私が、亡くなった叔父が経営していた今の病院に理事長として就任した時はまだ木造の病院で、当直室は畳の部屋で、当直医はそこで寝起きしていた。布団はきれいに畳んで押入れにしまわれていたのを見て驚いた。私もそれを見習い、同様にして1～2年当直をしていた記憶がある。戦後日本人は寝台で寝る習慣ができ、万年床という言葉は死語になったようである。

戦前の日本は年に1回必ず夏には畳を家の外に出し、天日に干し、叩いてほこりを払う習慣があった。最近畳や絨毯を天日で干している家庭は少ないようである。

日本は湿気が多く、家ダニの発生などで、アレルギー疾患も増えているのではないだろうか。

日本人の清潔好きも畳文化からきているのかもしれない。靴や下駄などの履物を履いて家に入る人はいない、外国では靴のまま家に入る習慣がある。手術室も靴のまま入る。トイレも、戦前は家庭で男女が別々に分かれていた。小、中学校から大学までも別々であった。男性の女性化もその影響かも。建築業者に男女トイレのあるマンションや家を作れとっているがまだ実現していない。

話を変えて、日本では宗教は昔から、仏教と神教が平和に共存している多神教の民族である。宗派が異なっても争いや、殺し合いなどはない。聖徳太子の和の精神に基づくものか、あるいは特有の民族性によるものかも知れない。

キリスト教やイスラム教は一神教であり、他の宗教は受け入れず、今でも宗派同士の争いがたえず、殺し合いまで起きている。

日本人の和の精神が輸出出来ないかとも思う。しかし逆に、戦時中の日本人による神風特攻隊の精神が、イスラム国の自爆攻撃に真似をされ、利用されているような気がする。

日本人の美德をもっとPRし、外国に輸出できるようにすべきと思う。

（参照） 県民間病院協会誌 （2011年1月号）